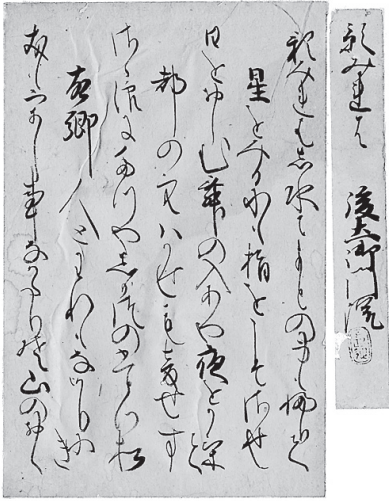


## 連歌切五点

岩 下 紀 之

最近入手した連歌切をここに紹介してみたい。翻刻と簡単な考証をほどこした。

### 連歌切一



影みれはし水にもとの身もふりて

星をみるにも指をこそさせ

日をおしむ舞の入あや夜をかけて

都の空はかせも音せず

さゝ浪にたつやしかつのひとつ松

故郷人とわれもなかりにき

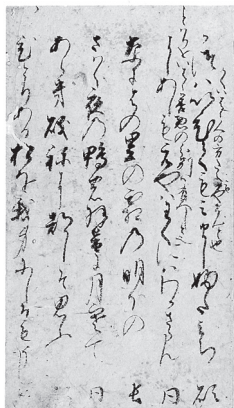
友もうし事なかりそ山のおく

たて16・3センチ、よこ10・6センチ。斐紙。これは宗砌句集の切と思われる。すなわち二行目から三行目までが、七賢時代連歌句集所収の『宗砌発句并付句抜書』二四七六、二四九三・二四九四と一致し、最後の二行は『竹林抄』『新撰菟玖波集』に宗砌の句として採られているのである。極めの後土御門院については、考証の必要はなかるう。なお終りから二行目「なかりにき」の「か」にミセ

ケチがある。

### 連歌切二

内  
万里小路惟房



かくいは、人の方たえもやせんと也

かつはいひてもみましふたみち

碩

ことはりをいは、善悪の分別は有へしと也

よしあしもえやはわくにはわかさらん

同

なにはの里の霜の明ほの

長

さはく夜の鴨の羽音につき寒て

同

あらし磯ねに都しそ思ふ

□

ひとりある松を我身にしろもうし

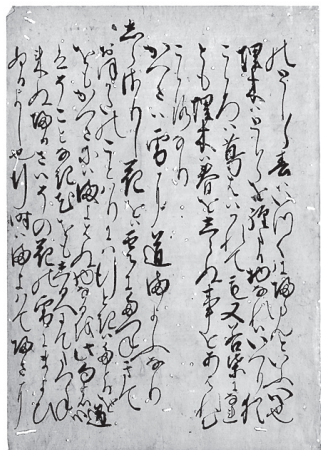
□

たて17・1センチ、よこ9・6センチ。楮紙。『伊勢千句』第

一百韻の三表十句目からの六句である。最後の二句、作者名摩滅して読めないが、宗碩の句である。初めの二句には簡単な注がほどこされ、やがては詳しい注釈に発展して行くのであろう。極めの万里小路惟房は正二位内大臣、天正元年薨。

### 連歌切三

釋  
工徹



のとしく春はいつくに帰らんといふ心也  
埋木はとしくを経たる物なれはいへり猶  
こゝろは葛ははかれても又若葉になれ  
とも埋木は春をしらぬ事をあはれむ  
こゝろなり

かへさは雪に道まよふなり

しらざりし花をは雲にたつねきて

おほかたのことはりに行ときはたとる道

をもかへさにはまよはぬ物なるを此句の心

はそことなき花をもしるへにてたつね

来ぬ帰るさはその花の雪にまよひ

ぬるよし也行時はまよはて帰さに

たて25・1センチ、よこ17・6センチ。楮紙。『竹林抄』の古注『雪の煙』の切である。貴重古典籍叢刊『竹林抄古注』一二七ページにあたるが、同書の底本は江戸中期写本とされるので、この切は参考に価しよう。しかし句の作者が表記されないのはいかながなものか。極めは正徹であるが、『竹林抄』注とは時代が合わないようである。ただ筆跡は有名な正徹本の『徒然草』との類似があるように思われる。

なお『宗祇の研究』四一一ページに専順・宗祇らの一座した百韻が翻刻されており、このような句が見える。

雪にはかへるかたも覚えず 順

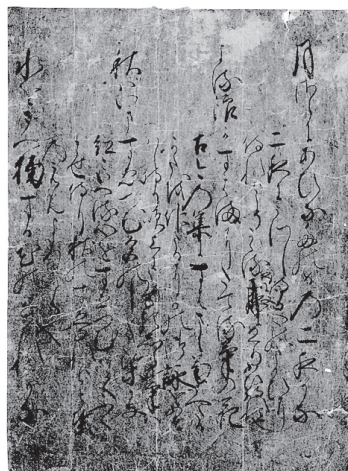
知らざりし花をばくもに尋来て 泰

他でもない専順の名句を専順の前句に付けているのだが、これはどういうことだろうか。作者は久泰で、この人は寛正二年正月二十五日の何路百韻で心敬・行助らと同座している。

連歌切五点（岩下紀之）

## 連歌切四

心敬僧都 月夜



月さらにあひなたのための二夜かな

二夜にうつし侍る心のたかひに

侍れはこそかゝる夜に又めぐりあひ侍れと也

よる浪かすはまにたてる菊の花

古今の集にすはまに菊うへたる

かたを作たるにかの御詠をあそ

はし侍り吹上にたてるしら菊は

秋はいますゑつむ色のした葉かな

紅といへる心をすゑつむにてふく

一五

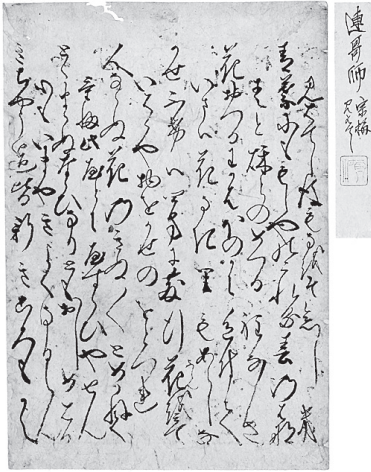
ませ侍り秋のすゑなればこと葉

のえんよろしくや

水をさへ掬する花のなかれかな

たて21・3センチ、よこ15・7センチ。渋茶色に染めた斐紙。四句とも心敬の作であり、注がある。これは『芝草句内岩橋』の切で『心敬集 論集』一四五ページ、『連歌貴重文献集成』第五集四一ページが該当する。心敬と極めた鑑定家はこの切が心敬の句集ということに気づいたのであろう。なお二行目の「侍る」にはミセケチがある。

### 連歌切五



見はてし後もなをそ恋しき  
青葉にももしやのこれる春のはな

春と秋とのめくる程なさ

花おつるわかほのかに色付て

いまは花なき里もあらしな

かせふけは四方に散行花をみて

いはゝや物をかせのをとつれ

人ならぬ花のきぬくゝとめかねて

けふ此やとにやすらひやせん

とゝまらぬならひなりともおしめはる

心もいまやきよくなるらん

きちやう迄皆新きころもかえ

たて22・7センチ、よこ15・6センチ。楮紙。三、四行目の句をのぞいて、すべて『園塵』第一に見える。兼載句集の切ということになる。極めの宗梅は、『顕伝明名録』に「宗祇門人宗祇若衆右筆」とある。『連歌史論考』の年表によれば、大永七年正月十九日の山何百韻、天文十三年十月十五日の山何百韻に一座している。宗祇の没した文筆から天文十三年まで、約四十年あまり、一応年代的には矛盾ないようである。

Five fragments of Renga manuscripts